

中国の少数民族の生業形態

—貴州省「黒ミャオ」族を事例として—

金丸良子

はじめに

中華人民共和国は典型的な多民族国家である。すなわち、人口の大多数（全人口の約92%、1990年人口センサス）を占める漢族の他、政府が認知しただけでも55の少数民族が分布・居住している¹⁾。これら中国に居住する少数民族の分布形態からみた特色としては次の2点があげられる。

第1点としては、ゴビあるいはタクラマカンの両砂漠に代表される広大な砂漠地帯を除外すれば、少数民族の居住地域の大部分が森林、動・植物、鉱物、水源などの天然資源に恵まれた地域であることがあげられる²⁾。第2点としては、西南地区においてミャンマー連邦、ラオス人民民主共和国、ベトナム社会主義共和国と接しているように、少数民族が分布している地域の多くは、国境周辺部に集中していることが指摘できる。とりわけ後者の第2点は、国防上の重要な地域を占めるといふ軍事上の理由によって、いわゆる対外「未開放地区」に指定されてきた³⁾。そのため、中国の少数民族に関するフィールドサーヴェイは希望する研究者が多く存在するにもかかわらず、中華人民共和国成立後長い間等閑視され続けてきた。

なお本稿では、フィールドサーヴェイという用語を使用するが、その理由は次のとおりである。一般に野外における調査は、フィールドワークという用語が用いられることが多い。しかしながらフィールドワークという用語には、特定の地点を集中的に調査するという意味がある。これに対して、フィールドサーヴェイのほうは‘general survey’つまりある一定の範囲を総合的に調査するという意味が強い。本稿では特定の寨を事例としてとりあげるが、その寨のみならず周辺地域全体との関連にも大いに配慮しつつ、考察を進めているのでフィールドサーヴェイという用語を用いた。

さらに、かつて拙論（金丸，2000：243-244）でも論じたことがあるが、中華人民共和国成立後、日本人研究者など外国人研究者が実施した少数民族に関するフィールドサーヴェイを含む調査・研究は、次の3段階に大きく分類することができると思われる。

その第1段階は、外国人研究者が中国国内においてフィールドサーヴェイに従事することは勿論のこと、友好訪問すら自由に行えなかった時期で、1970年代までが該当する。この段階では、中国人研究者の書いた論文や新聞記事などを参照あるいは依存したりしなければならなかった。しかも当時においては、中国人研究者自身がフィールドサーヴェイを実施する余裕があまりなく、

研究成果も乏しかった。その数少ない研究成果に関しても、大部分が内部資料扱いとされ、外国人研究者には入手困難どころか、その存在すら知られていなかった。そのため、この段階では、中華人民共和国以前に刊行された内外の研究者、著作や論文あるいは正史や地方誌（志）などの諸史料からの分析が主体となった。その結果、この段階においては少数民族研究は一般に低調であったといえる。

1980年代に入ると、外国人研究者が友好訪問という形式ではあるが、少数民族居住地区を短期間参観することや、少数民族を直接訪問する目的の企画旅行が徐々にではあるが可能となってきた。そして、それらの参観あるいは旅行を通して、社会主義体制を堅持する中国での少数民族の生活の一部が知られるようになってきた。第2段階のはじまりである。その結果、わずかではあるが、中国の少数民族研究を専門とする研究者が輩出したり、日本文化の源流を中国—西南中国⁹⁾とりわけ雲貴高原の少数民族地帯—に求めようとする研究も実施され出した。この期間は約10年弱続いた。

その後1980年代になると、中国の大学など専門機関での語学研修を主体とする留学が可能となった。その結果、中国で語学研修を修了した学生あるいは若手研究者の中から、中国の少数民族に興味・関心をもつ人びとが出てきた。そして、このような人びとは、懇意となった中国人研究者の協力などを得て、少数民族居住地区に単独でフィールドサーヴェイに出かけることになった。しかし当時、少数民族地帯は対外「未開放地区」に指定されていた。そのためフィールドサーヴェイは困難をきわめた。

一方この時期になると、少数民族に関心をもつ（多くは少数民族出身者であるが）中国人留学生が多数来日し、日本人研究者の指導を受けて中国の少数民族調査に従事した。少数民族居住地帯などに設定された対外「未開放地区」の指定がほとんど解除された現在においても、外国人が自由に出かけることが可能なのは、一般の観光用のモデル集落を除き、県の行政中心である県城あるいは地方中心集落である鎮ないしは郷までであり、少数民族が居住している村さらにはその下部（位）行政単位である寨⁵⁾などに入るには、かなりの困難が伴うからであった（金丸、1997、ダニエルス・金丸・長谷川・松岡、1999など）。

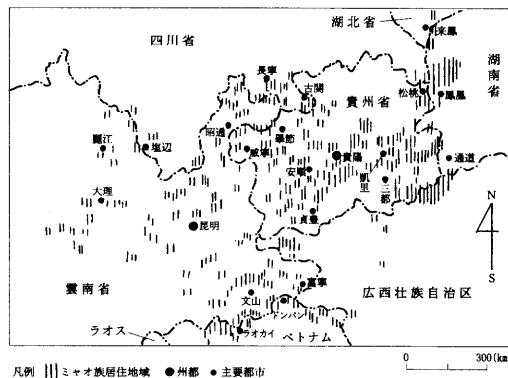
本稿が研究対象とする貴州省に居住する「黒ミャオ」族と称されるミャオ族の分派集団は、上述した中国に居住する少数民族の分布形態からみた特色の第1点、すなわち、かつては森林などの天然資源に大変恵まれた地域を主たる生活の場としてきた。この地域に定着を開始した「黒ミャオ」族の集団は、当初は伝統的な生業であった焼畑農業に従事していた。しかし、その後の人口増加などに伴い、周辺の上腹斜面を開墾して棚田を造成し、天水利用による水田稲作が生業の中心となってきた。貴州省東南部に位置する黔东南苗族侗族自治州丹寨県雅灰郷送隴村送隴寨に居住する「黒ミャオ」族も、このように上腹斜面に展開した棚田において、水田稲作を実施している。本稿では、「黒ミャオ」族の水田稲作を中心とする生業に関して、現地でのフィールドサ

ーヴェイから得られた資料を中心に論じていくことにする。

また上述の「黒ミャオ」族という名称は、次章においても詳述するように、漢族をはじめとする他の民族が女性の着用する衣服の色彩によって便宜的につけた他称である。日本人としてミャオ族を最初に調査した鳥居龍藏（鳥居，1907，〈鳥居，1976所収〉）も、この名称を用いている。なお丹寨県は、1980年代末に對外「未開放地区」の指定が解除されたものの、県城（県の中心地、人民政府所在地）から遠方に位置するという地理的条件などから、県の担当者より住民の団結を乱さないことなど、調査項目や期間について制約されたことを指摘しておきたい⁶⁾。

1. ミャオ族の分布

中国に分布・居住する少数民族の中でもミャオ族は、雲貴高原を代表する山棲みの集団である（第1図）。すなわち、ミャオ族は雲貴高原を主たる居住範囲とする少数民族の中で、1990年度人口ではそれまで最大の人口規模を誇っていたイ族を抜いて、最大の人口（約740万）を擁している（第1表）。この雲貴高原は西南中国を代表する高原である。その範囲は雲南省・貴州省を中心に、これらの両省に隣接する省・自治区の一部にまで及ぶ。また雲貴高原は熱帯カルスト地形が卓越する高原としても名高い。高原の平均海拔高度は1000～2000メートルで、全体として西部から東南および北東にかけて緩やかに傾斜し、標高を下げている。高原には、東流して長江水系に注ぐ河川と、東南に流れて珠江支流西江に注ぐ河川が存在する。これらの両河川は、深い河谷を刻んで高原を分断しているため、起伏がきわめて大きい。それ故、山地性高原や開析高原面を形成したり、さらには現地で「壩子」と称される山間小盆地も多く存在する。ミャオ族は、これらの高原や「壩子」を中心に分布・居住している。



第1図 ミャオ族の分布
 (出所) Jacques, L. (1972): "Un Village Hmong Vert du Haut Laos" (Editions du Central de la Recherche Scientifique) 付図を修正して改図。

第1表 雲貴高原における主要少数民族の人口推移

順位	民族名	主要居住地域 (省、1990年)	人口(人)			同左 全国順位
			1953	1982	1990	
1	イ族	雲南・四川	3,250,000	5,457,251	6,572,173	6
2	ミャオ族	貴州・湖南	2,510,000	5,036,379	7,383,622	4
3	ブイ族	貴州	1,250,000	2,112,389	2,548,294	10
4	トン族	貴州・湖南	710,000	1,426,335	2,508,624	11
5	ヤオ族	広西・湖南・貴州	670,000	1,403,664	3,137,033	12
6	ペー族	雲南	570,000	1,123,010	1,598,052	14
7	ハニ族	雲南	480,000	1,059,404	1,254,800	15
8	タイ族	雲南	420,000	840,590	1,025,402	18
9	リス族	雲南	317,000	480,460	524,859	20
10	ラフ族	雲南	139,000	304,474	411,545	21

〔出所〕1990年人口センサスなどにより作成。

しかしながら、ミャオ族の分布範囲は雲貴高原などの中国領にとどまらず、はるか国境を越えてインドシナ半島北部の山岳地帯—タイ王国、ラオス、ベトナム—にも多数居住している。この点がミャオ族の分布上の特徴として指摘できる。このように、雲貴高原を中心に、その一部が国境を越えて遠方に分布・居住している民族としては、ヤオ族が存在するだけである⁷⁾。しかしヤオ族は、ミャオ族同様山間支谷などに形成される「壩子」と称される低盆地よりも、山腹斜面あるいは山頂近くに集落を構えることが多い。つまり、典型的な山棲み集団である点も類似している。この点は、平野などの平坦地において定着し、水田稲作を生業としている漢族とは大きく異なる点である。つまり、ミャオ族などの山棲みの集団は、伝統的には焼畑農業や狩猟が生業の中心であったので、耕地や猟場を求めて移動するという移動生活を実施してきた。そのため、ごく一部であるが現在でも、移動生活を続けている集団も存在する。また、定着して水田稲作を行なう場合でも、山腹斜面での棚田が主体であるので、河川水ではなく天水を利用している。

さらに、ミャオ族とヤオ族は言語系統上の分類においても、漢・チベット語族、ミャオ・ヤオ語群を形成する同系統の集団であるが、同一の集落に同居すなわち雑居して生活するという形態はほとんどみられない。すなわち、雲貴高原においては、多くの場合ミャオ族の集落より海拔高度の高い場所にヤオ族の集落がみられるという、海拔高度差による住み分け現象がみられる。さらに興味深いことには、ベトナム北部の山岳地帯においては、両民族の海拔高度差による住み分け現象が逆転し、ミャオ族の集落の方がヤオ族の集落よりも高所に位置するという傾向が強い。理由は、ベトナム北部には、ミャオ族よりもヤオ族の方が先に進出したので、比較的土壌条件の良好な低所にヤオ族が定着したのではないかと推定できる。

以上論じたようにミャオ族は、中国領内においても西南中国とりわけ雲貴高原を中心にその分布範囲は大変広範囲である。そのため、ミャオ族は別名古くから「百苗」と称されているように、多くの分派集団に分かれていることが認められる。ミャオ族の分派集団は、既に指摘したように中華人民共和国成立以前までは女性が日常生活において着用している民族衣裳の色彩によって、分派集団を区分することが慣例となっていた。理由は、ミャオ族の女性が着用している衣服が分

派集団ごとに色彩の異なった上衣とプリーツスカートを着用することを基本型としているので、ミャオ族以外のびとにとっても外見上容易に識別することが可能であることによると推察できる(金丸・久野, 1999)。

上述した鳥居龍藏は、各種の漢籍史料の他、Du Halde, Lockhart, W., Hosie, A.など多くの外国人研究者⁹⁾の見解を参照したのは勿論のこと、さらに実際に現地でのフィールドサーヴェイでの見聞した内容なども加味し、純粋のミャオ族⁹⁾の分類を第2表のように行った(鳥居, 1907, 〈鳥居, 1976所収: 44-47〉)。

第2表 鳥居龍藏によるミャオ族の区分

分派集団名	特色	分布地域
紅ミャオ族	赤色の衣服を着用	湖南省に接する貴州省東部
青ミャオ族	青色の衣服を着用	貴州省中央部
白ミャオ族	白色の衣服を着用	貴州省中央部
黒ミャオ族	黒色の衣服を着用	貴州省東南部
花ミャオ族	蠟緞染および縫取した衣服を着用	貴州省西部・雲南省・広西省(現広西壮族自治区)インドシナ半島北部

〔出所〕鳥居龍藏(1907)『苗族調査報告』東京帝国大学人類学教室、鳥居龍藏(1976)『鳥居龍藏・全集 第11巻』朝日新聞社 44～47頁より作成。

なお、ミャオ族の女性が日常生活において常用しているプリーツスカートの素地は、伝統的には自らが木綿をつむいだものを使用した。そしてそれを染色(藍染め)してスカートとして完成させた。そのようなことなどから藍染めの技術は、ミャオ族が開始したといわれている。すなわち、ミャオ族が実施している藍染めは、現在日本で一般的に行われているタデ科のタデアイ(*Polygonum tinctorium*)を使用するのではなく、キツネノマゴ科のリウキュウアイ(*Baphicacanthus cusia*)を用いる。またその染め方も異なる。すなわち、リウキュウアイの場合、夏季に刈り取った若葉を石灰水が入った桶に入れ、2日間寝かす。そうすると若葉が発酵しはじめ、酵化されたインジコが生成できる。このようにして生成したインジコを含む泥状の溶液(泥藍という)に糸または布をつけて染めあげるという簡便な染め方である。この点が、タデアイを使用する藍染めの場合、アイを発酵させた黒茶色の塊を、臼で搗き固めた藍玉をつくり、そこから藍汁をとり染色するという方法とは異なっている。リウキュウアイを用いての染色方法は、伝統的に沖縄県地方で実施されている染色方法でもある(三木産業技術室, 1992: 31-32)。

しかし鳥居龍藏は、第2表に示した分類というものは支配民族である漢民族が便宜的に分かりやすいが、衣服の色彩から行った「土俗ノ区別」であると考えた(鳥居, 1907, 〈鳥居, 1976所収: 44〉)。

以上のように、女性の民族衣裳とくにプリーツスカートの色彩を規模とした区分は問題が存在することは否定できない。とはいうものの、実際にミャオ族居住地区をフィールドサーヴェイしてみると、当事者であるミャオ族間でもこのような区分で他の分派集団を互いに呼び合っている。

例えば、「黒ミャオ」族、「白ミャオ」族というように、異なった分派間での通婚をはじめとする交流・接触は、それぞれの集団間ではほとんどなされていないという状態である。また地元に住居するトン族、スイ族、漢族なども、ミャオ族をこのような女性が着用しているプリーツスカートの色彩による名称で呼んでいる¹⁰⁾。

しかしながら、基本的には以上述べたような呼称方法は便宜的なものであるため、改める必要があると思われる。そのような点を考慮して北京市に存在する中央の少数民族研究者を中心に、方言を主体とした言語系統上からの区分が提案されている（第3表）。中央学界レベルにおいてはこの分類に基づいたミャオ族の区分が中心となっている（国家民族委員会民族問題五種叢書編輯委員会編、1981など）。しかし、地元の少数民族研究者の間では、この区分が完全に浸透しているとはいえない。そのような状況なので、本稿においては、従来の女性が着用する民族衣裳による分類に従って、「黒ミャオ」族という名称を使用した。

第3表 言語系統（方言）からみたミャオ族の区分

区分の標準	名称	主要分布地域	自称(主要)
言語 (方言)	湘西方言	湖南省、貴州省松桃、四川省秀山、湖北省(来鳳、鶴峰)	コ・ション、クー・スワン
	黔東方言	貴州省(黔東南、黔西)、 広西壮族自治区(桂北)	ムー、モー
	川黔方言	四川省南部、貴州省(黔西、黔中)、雲南省、広西壮族自治区(桂西)	モン、ミャオ

(出所) 国家民族委員会民族問題五種叢書編輯委員会編(1981)『中国少数民族』人民出版社446頁より作成。

2. 「黒ミャオ」族の特徴

ミャオ族の分派集団「黒ミャオ」族という名称は、既に論じたように女性が「ハレ」の日は勿論のこと、日常生活においても伝統的な民族衣裳である黒色の上衣およびプリーツスカートを好んで着用していることに因んでいる。女性が着用している衣服が黒色を呈するのは、彼女らが伝統的に行ってきた藍染めの技術の結果である。

すなわち、上述したようにミャオ族は、着用する衣服に関しては自らが糸を紡ぎ布を織り、染色つまり藍染めを実施してきた。アイによる染色は、藍色つまり青色に仕上がるという特色をもつ。それ故、このようにして仕上げた民族衣裳を常用しているミャオ族の集団は、「青ミャオ」族と呼ばれた。「黒ミャオ」族も「青ミャオ」族とまったく同様に、リュウキュウアイを用いて染色を行う。しかしながら、この集団が染色した藍染めは、青色ではなく黒色を呈することになる。理由は、「青ミャオ」族の染色と同様に「泥藍」と称される藍汁によって染色をするのであるが、「黒ミャオ」族の場合、一旦青色に染色された綿布に更に何回も染色を繰り返して実施する。そうすると、藍汁が更に綿布に浸透し、黒色となる。「黒ミャオ」族が着用している衣服の

分布はこのようにして何回も染色を繰り返すことによって黒色になった布を用いているためである¹¹⁾。

以上論じたように、黒色の衣服を着用するというのが「黒ミャオ」族の最大の特徴となっているが、その他彼らが居住している家屋の形態に関してもきわだった特色がみられる。つまり、ミャオ族は、家屋が密集して集落を形成する、いわゆる集村形態を採用している。盗賊などから財産である牛などの家畜や収穫した穀物を保護するためであるとされる。この点は、西南中国に居住する少数民族も同じような形式の集落を形成している¹²⁾。しかし、ミャオ族その中でも「黒ミャオ」族の場合は、伝統的には集村形態を採用しているが、独自の機能が付随していた。

すなわちこの付随機能とは、各集落では集落の出入口に該当する箇所を門（「寨門」と呼ばれる）をつくり、夜になるとその寨門を閉じ、翌朝開門するというものである。

貴州省黔東南苗族侗族自治州從江県谷坪郷山崗村の各寨においては、寨門が残っている。とくに同村燕窩寨の寨門は瓦屋根が付いた立派な門であり、扉に使用されている板木も厚く固いものである。扉は毎朝6時になると開かれ、夜も6時になると閉じられる。扉の開閉時間になると、扉にかけてある小型の木板が木槌によって打ち鳴らされ、その音が寨中に響きわたる。この開閉の役目を担う者は寨の住民の特定の家の者で世襲制となっている。そのため、寨の他の住民は寨門の開閉の依託料として、年間1戸当たり収穫が良好な年度では30斤（1斤は500グラム）前後の食糧、不足の年度は20斤前後の食糧を供出している（田畑、1998：33）。

現在では「黒ミャオ」族の多くの集落では、この種の寨門がとりこわされたり、あるいはその跡だけとなっている場合が多い。しかし、とくに「黒ミャオ」族の集落にこのような寨門が設置されたのは、彼らが比較的早い時期から焼畑農業主体の移動生活をやめて、山腹斜面などを開墾して棚田を造成し、天水利用による水田稲作に従事してきたことによる、と推定できる。つまり、棚田から収穫した籾などの収穫物を天井裏や集落内に設置した穀物倉庫に保管していたためであると思われる。さらに、ベトナム北部の山岳地帯に分布・居住するモン（Hmông）族と呼ばれる「白ミャオ」の集落は、中国領のミャオ族の集落ほど大規模なものが少ないが、集落の周囲全体を高さ1.5メートルぐらいの石垣で囲み、その出入口には門が設置されていることが多い。主として家畜・穀物などの盗難に対する防御策のためであるという。

また、「黒ミャオ」族などのミャオ族の家屋は、切妻屋根の木造二階建て住居が基本である。しかし「黒ミャオ」族の家屋は、前述の通り山腹斜面上に建設されることが多い。そのため、これらの家屋の一部は、家屋後半部の土間領域から前半部に向かって板敷がせり出した「吊脚樓」（脚を吊した家屋）と称される独特の構造をしている。つまり、このタイプの家屋は、山腹斜面の傾斜を利用しているため、敷地が上下の2段から構成される。具体的に述べれば、下段の敷地には長い柱を、上段の敷地には短い柱を当てる。そうすると、家屋の前半部の床板と、後半部の地面がちょうど水平の状態となる。つまり、家屋の前半部は二階建ての構造となり、後半部は土

間形式の平屋という構造になる。その前半部の一階部分は家畜小屋や農具などの収納庫として利用され、二階部分が家族の生活空間として利用されている。家族も一階部分は家畜などが住む場所で、二階部分に居住しているという意識をもっている。

この点に関して、建築学の専門家は「吊脚楼」が二階建て住居ではなく、平地土間式住居の変種であるという。その理由は、ミャオ族の「吊脚楼」では家族が生活している場所は、家屋の後半部と連続している空間（ここを一階とする）である。それ故、基本的には一階建ての土間形式の住居であると主張する（浅川，1994：360-361）。しかしながら、筆者の調査した「黒ミャオ」族を含むミャオ族の「吊脚楼」の家屋のほとんどは、山腹斜面の傾斜地に建てられていることもあり、玄関は妻入りにおかれ、まるで高倉式住居のように二階に入るという形式であった。以上から「吊脚楼」の家屋がすべて平地土間式住居の変種であると断定できないと思われる。

また、平地土間式住居となっているのは、ミャオ族居住地区でも比較的交通の便がよい地域で、周辺に居住する漢族の影響を早くから受けた地域にみられる傾向が認められる。以上のことから、ミャオ族の「吊脚楼」の家屋は、むしろ高床式の木造二階建て住居の変種であるとみなした方がよいのではないかと考える。

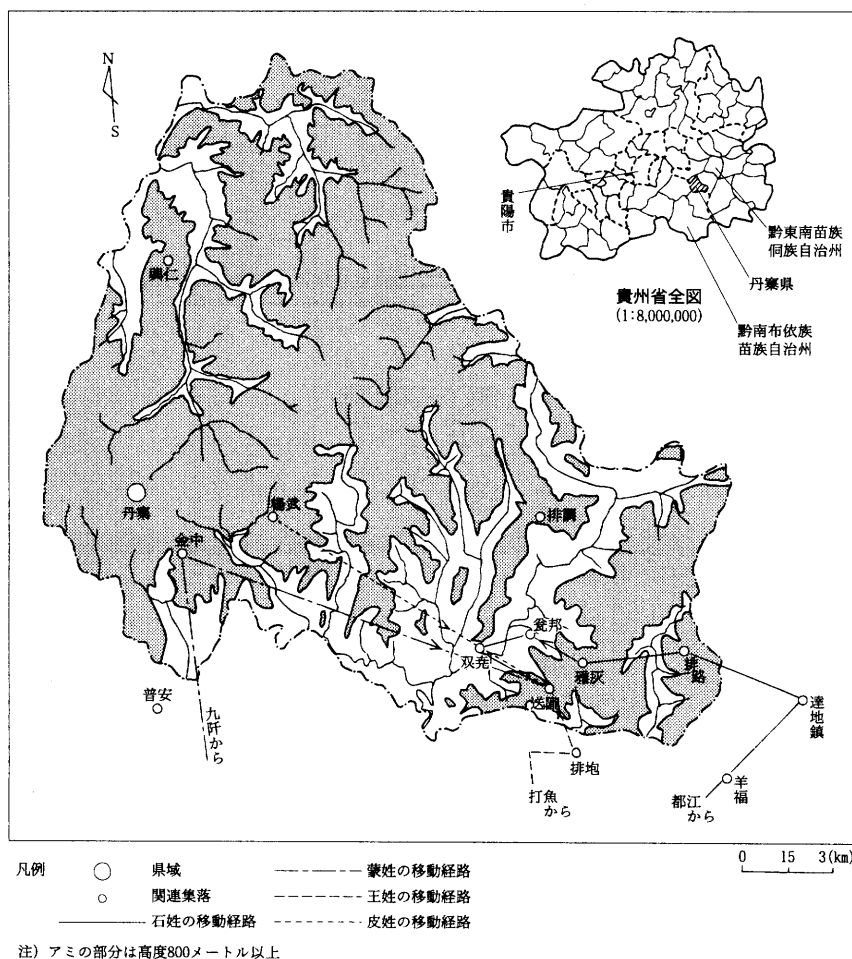
以上論じたように、「黒ミャオ」族はミャオ族の中でも比較的早くから定着し、棚田を中心とする水田稲作に従事してきた。この点に関しては、同様に早くから定着し、農業に従事するようになった湖南省西部の「湘西」方言を話すミャオ族の集団は、漢族居住地区に近いためか、漢化の影響を強く受けた。すなわち、中華人民共和国成立以前においても、この集団はすべてミャオ語ではなく、中国語（漢語）が会話の中心となっており、衣服も漢族と同様のものを着用しており、民族衣裳は若い女性が祭りなどの「ハレ」の日のみ着用するという状態となっている。つまり「黒ミャオ」族の場合定着したにもかかわらず、湖南省西部の「湘西」方言を話す集団とは異なり、言語および民族衣裳にみられるように従来からの伝統を堅持してきたといえる。

なお「黒ミャオ」族は、早くから水田稲作に従事してきたので、それに伴う農耕儀礼（一部は漢族など他民族の影響もみられる）が比較的豊富である。この点は、現在でも焼畑農業などに従事し、移動生活を行うことが多い「白ミャオ」族あるいは漢化を早くから受けた「紅ミャオ」族などの集団では、前者については農耕儀礼が非常に少ないという傾向が、また後者に関しても漢族と同様の農耕儀礼が多いという傾向がみられ、「黒ミャオ」族とは異なっている。さらに上述した寨門などが残っていることから推察できるように、生産責任制導入後に公布された集落内の規則である「郷規民約」に関しても、それ以前の伝統的な慣習法がとり入れられ、規約としてもっとも整備されているのが「黒ミャオ」族であるといえる。

3. 生業形態

1) 地域の概略

研究対象集落である雅灰郷送隴村は、貴州省黔东南苗族侗族自治州の西南端に位置する丹寨県に所属している。丹寨県は黔东南布依族苗族自治州に隣接し、県城丹寨（龍泉鎮、以前は八寨と呼ばれた）は、黔东南苗族侗族自治州の州都凱里市および黔南布依族苗族自治州の州都都勻市との両州都に近い交通上の要所となっている（第2図）。県の住民はミャオ族が多数を占め、その他漢族、スイ族、トン族、プイ族などにより構成されている¹³⁾。主要な産業は農業である。また金の採掘も盛んで、埋蔵量は貴州省最大とされる。



第2図 地域概略図

〔出所〕現地での聞き取りより作成。

雅灰郷に行くには排調鎮を経由する。排調鎮は県城の東方43キロメートルの所に位置する、県東部の中心集落である。排調鎮までの道路の一部は未舗装のため、車で2時間から3時間も要

する。路線バスの定期便も日に数回運行されている。排調鎮から雅灰郷までは、1979年に開通した馬車のみが通行できる小道を進む。しかしこの小道は、狭く道路もわるいので他の車両が通行できない。そこで、1995年から道路の拡張工事が行われている¹⁴⁾。そのため、途中からは、山腹斜面を削ってつくられた馬車道ではなく、以前から使用されてきた西江上流都柳江の支流を川舟で下る。川舟は、かつては塩あるいは米などの重量の嵩張る物品を運搬するのに用いられていた。現在工事により馬車道が通行不能なので、川舟による物資の輸送がかつてのように盛んになっている。

約2時間、川舟で下り再度上陸する。その後は馬車に揺れながら雅灰郷の郷人民政府がおかれている雅灰村雅灰寨に到着する。雅灰寨に着くまでに6時間以上も要したのは、川舟に乗船したことや、排調鎮（海拔680メートル）とここ雅灰寨（海拔900メートル）との高度差があったためである。すなわち、船着場からは急な登りで、馬車ですら休憩のために度々休むという状態であった。

雅灰村雅灰寨は、急な坂道を登りきった所、すなわち小山の山頂近くに位置している。雅灰郷の人口は6,516人（1997年統計、以下同様）、戸数は1,522戸である。郷は12の行政村から形成されるが、各行政村は複数の寨によって構成されている。寨の総数は50で、それは70の組¹⁵⁾に分けられている（第4表A）。

第4表 雅灰郷の概要

A. 各村の概要

村名	海拔高度(m)	人口(人)	寨数	組数	主要民族
雅灰村	950	700	3	9	ミャオ(85)・漢(15)
排寿村	780	780	3	4	ミャオ(100)
翁邦村	800	462	2	4	イ(50)・漢(30)・ミャオ(20)
巫棉村	800	455	2	3	スイ(60)・漢(40)
送臘村	900	1109	4	8	ミャオ(95)・漢(15)
叮咚村	650	482	2	4	漢(80)・ミャオ(20)
羊高村	850	410	5	5	ミャオ(50)・漢(50)
羊場村	780	241	3	3	漢(40)・イ(20)・トン(30)・ミャオ(10)
殺邑村	800	611	10	10	漢(90)・ミャオ(10)
殺高村	1004	844	8	10	漢(60)・ミャオ(35)・イ(5)
套鳥村	1100	530	5	5	漢(40)・ミャオ(30)・スイ(10)・その他(20)
上從村	850	271	3	6	スイ(40)・ミャオ(30)・トン(20)・漢(10)

〔注〕（ ）内は%

〔出所〕 雅灰郷人民政府での聞き取りより作成。

B. 民族別人口

名称	人口(人)	比率(%)
ミャオ族	3578	54.9
漢族	1270	19.5
トン族	491	7.5
スイ族	788	12.0
イ族	378	5.7
他の民族	15	

〔出所〕 雅灰郷人民政府での聞き取りより作成。

郷人民政府所在地は、既に指摘したように雅灰村雅灰寨にある。ここには、政府の各機関の出張所¹⁶⁾の他に、農曆の牛と羊の日に開催される定期市がある。定期市は郷内では1ヶ所のみで、塩・砂糖・洗剤などの日用雑貨品や衣類および近くで生産された野菜などが中心である。前者の日用雑貨品や衣類は、定期市を回っている行商人が持ち込んだものである¹⁷⁾。そのためか、雅灰には行商人が宿泊する旅社（旅館）も存在する。

しかし、黔东南苗族侗族自治州の南部に位置する従江県の山間部に居住する「黒ミャオ」族とは異なり、雅灰郷の「黒ミャオ」族は日常生活において、女性が民族衣裳を着用していることが大変稀であり、定期市においてもほとんど民族衣裳を着ている女性をみかけなかった。この点は、比率として多くないが漢族なども雑居しているので、漢族の影響を受けたのではないかと推察できる。

中華人民共和国成立後の1953年に土地改革が実施され、1956年には雅灰人民公社が成立した。その後1980年に人民公社解体の一環として雅灰人民公社も解体され、生産責任制が導入された。なお郷内で電気が通じているのは雅灰村と排寿村の2ヶ村のみである。また学校は、1年生から6年生までの公辦小学（小学校）が雅灰と排路（以前郷であったが1992年に雅灰郷と合併、郷人民政府は殺高村におかれた）に設置されている。その他、教員の給与や校舎の一部を村民が負担する民辦小学（1年生から3年生まで）が各村におかれている。上級の中学校は郷内に設置されていないので、中学校に進学するには排調鎮にまで出かけなければならない。

雅灰郷の民族別人口は、ミャオ族・漢族・トン族・イ族・スイ族の順となる（第4表B）。ミャオ族は全体の過半数の55パーセント弱を占めている。イ族の多くは三都水族自治県普安から移動してきた。またトン族の場合は、漢族に嫁いで当郷に来住した者が多く、漢化が著しく進んでいるとされる。

雅灰郷のミャオ族は「黒ミャオ」族であるが、当郷では「黒ミャオ」族を女性が着用しているプリーツスカートの長短や居住している場所などによって、次の4集団に分けられている。すなわち、「雅灰ミャオ」族別名「長裙ミャオ」族（長いプリーツスカートを着用しているミャオ族）、「短裙ミャオ」族（短いプリーツスカートを着用しているミャオ族）、「八寨ミャオ」族（八寨〈丹寨の古名〉に住むミャオ族）、「白領ミャオ」族（丹寨県白領地方に住むミャオ族）である¹⁸⁾。その中でも「雅灰ミャオ」族が半数近くの40%を占めているが、それぞれの行政村ではミャオ族の集団が異なっている。なお、郷内の各寨においては、1つの民族集団によって形成される集落もあるが、複数の民族集団が同居つまり雑居している集落もみられる。さらに一般には、異民族とミャオ族との間では通婚などがみられることが少ない。しかし、郷内においては「黒ミャオ」族の異集団や異民族間の通婚もみられる。この点も漢民族の影響であると思われる。

調査対象集落送隴村は当初「ワンジュ」と呼ばれていた。しかし周辺の人びとがこの名前を笑うので、「套弄」と改名した。「稻藁」という意味である。当寨では火災防止のために稻藁を家の

周囲に積み上げることを禁止していた。そのことに因んで改名されたのである。「套弄」は中華人民共和国成立以前まで使用された。送隴村までは雅灰寨から距離的には約4キロメートルと大変近い。しかし道路は道幅が非常に狭く、一部は水田の畔道を歩かねばならないが、山腹斜面を横断する行程がほとんどを占めるので、急な登り下りは存在しない。送隴村は4寨から構成されているが、そのうち送隴寨のみは戸数・人口とも多いので、5組に区分されている（第5表）。それぞれの寨は近くに位置しているが、互いに目でみることはできない。村全体で水田が560.5畝（1畝は6.67アール）、畑地が300畝ある。山林面積は統計がないため不明である。1983年に生産責任制が導入された。それを契機として水田・畑地および山林を住民に均等分配した。水田・畑地は1人当たり0.5畝程度、山林は住民と相談して分配した。つまり、樹木が多い山林では比較的多く分配した。

第5表 送隴村の戸数と人口

名	組	戸数(戸)	人口(人)	水田(畝)	畑地(畝)
摆久寨	第1組	19	81	36.5	20.0
羊福寨	第2組	21	103	45.5	35.0
送隴寨	第3組	41	172	90.0	40.0
	第4組	31	151	67.5	30.0
	第5組	19	97	49.5	25.0
	第6組	48	189	85.5	60.0
	第7組	32 ^①	159	92.0	50.0
也五寨	第8組	36 ^②	157	94.0	40.0

〔注〕①漢族6戸(30人) ②漢族6戸(24人)

〔出所〕送隴村での聞き取りより作成。

送隴村には、上述したように、1年から3年生まで教える民辦小学（小学校）が設置されている。創設は1968年である。児童は69名で教員は公辦教師2名、民辦教師3名の合計5名である。児童はすべて送隴村の住民の子弟で、1年生40名、2年生16名、3年生13名である。公辦教師の2名は雅灰郷の他村出身の漢族で、師範学校卒である。3名のうち1名の民辦教師は本寨出身の「黒ミャオ」族である。学歴は3名とも初級中学校卒である。これらの教師は、国家が各戸より徴収した教育付加費より、公辦教師の6ないし7分の1の月給60元前後が支給される他、以前は村から食糧の支給を受けていた。しかし1983年からは、食糧の供給の代わりに、住民同様水田・畑地および山林が分配された。これを責任地という。この点は、他の少数民族地帯での民辦教師の多くが、依然として月給と米・トウモロコシなどの食糧の現物支給であるのと大きく異なっている。以前は教育費がすべて無償であったが、現在では学費・本代として、1年生では学期ごとに20元余り、2年生は25元余り、3年生は30元余りを徴収している。そのため、通学できない子供や1年だけで退学する児童もあるという。

また村内には郷人民政府の出張所などの政府の建物は存在しない。それ故、村内での会議は、党支部書記宅かあるいは村の幹部の自宅で開催される¹⁹⁾。1994年には送隴寨内の数十戸が共同して小規模な水力発電を建設した。テレビは村内で1台だけある。この発電のおかげで受信が可

能となった。他の多くの家では石油ランプが日常的に使用されている。

井戸は各寨内に存在する。送隴寨には5ヶ所井戸があるが、そのうち2ヶ所は寨から離れた場所にある。第6表にみられるように、各井戸には使用者が決まっている。つまり姓によって使用できる井戸が異なっているのである²⁰⁾。なお、送隴村では、近くの小川からひく水道工事が1995年から開始された。翌1996年からはその水を使用することができるようになった。しかしながら、国家がその工事代の一部を補助するというものの工事費がかさむため、水道はごく一部の家屋にしかひかれておらず、多くの家では従来どおり井戸を使用している。

第6表 送隴寨の井戸

名 称	使用する姓	備 考
ジューイ	石・皮	寨より1km 離れている
ヤンバ	石・蒙・王	
オンリィア	王・皮・石	寨より0.7km 離れている
オンリユー	章・石・蒙	
イエゴ	石・蒙	

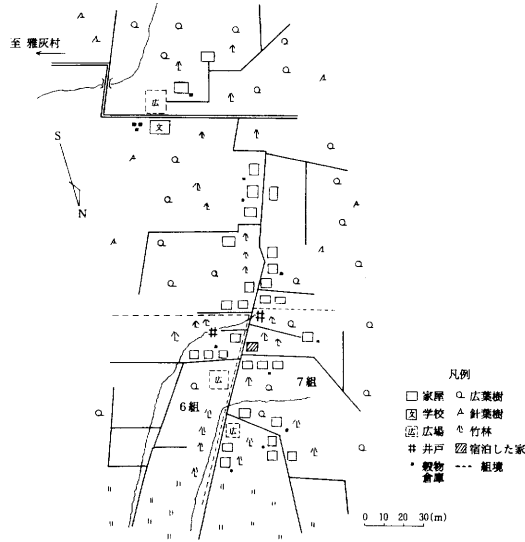
〔出所〕送隴村での聞き取りより作成。

村内で他に目にとまるものとしては、ディーゼルエンジンで可動さす米搗き機があげられる。他のミャオ族の集落に宿泊すると、翌朝足踏み式の横臼で米を搗いている「バツタン」、「バツタン」という音で目を醒まさせられることが多い。送隴村全体でこの種の米搗き機が11台ある。最初の導入は1983年のことで、生産責任制が導入された直後に、一部の住民が使い出したようである。この点も他のミャオ族の集落とは異なっているが、漢化の影響を受けたものと推定できる。

調査地は、上述したように村が4寨に分散していることや、村の人口が1,000人以上であり大規模ということなどから、村の中心的な寨である送隴寨に限定した。送隴寨は5組からなり、戸数171戸、人口768人の比較的規模の大きな集落である（第3図）。住民は漢族6戸、30人を除くとすべて「黒ミャオ」族の「長裙ミャオ」族である。

送隴寨を含む各寨の住民は、例えば、石とか蒙というように、各姓ごとに寨に移住してきたようである²¹⁾。というのは、各姓ごとに当寨に到着するまでの経由した地点を、伝承という形式ではあるが知っているからである。石姓の場合、祖先は江西省珠市巷から山伝いに湖南省経由、榕江（黔东南苗族侗族自治州榕江县）に移動し、都江・羊福（共に黔南布依族苗族自治州三都水族自治县）などを通過し、達也（黔东南苗族侗族自治州雷山县）に移り、その後丹寨県内の套鳥・排路・雅灰・瓮邦・双堯と主として河川沿いに遡上して当寨に到着した。当寨に定着してから既に13代目であるという²²⁾。他姓の場合も石姓と同様に、江西省方面から西進して当寨に移動してきたという伝承を有している（第2図の矢印を参照）。しかし当寨に定着したのは比較的遅く、定着してから7～8代しか経過していない。

既出の第3図は送隴寨の全域を示してはいないが、送隴寨の家屋配置の特色が判明する。家屋



第3図 送隴寨の概略図(部分)
〔出所〕現地での聞き取りより作成。

は山腹斜面の山頂近くの傾斜地に細長く展開し、その下方前面には水田が広がっている。家屋の形態は、全体としては集村形態といえるが、1戸1戸が明確に離れており、少し間隔が生じていると竹林や雑木林となっている。また家屋規模も比較的大きい。この点は、兄弟が分家したといっても食事の煮炊きをするイロリヤカマドを別にするという意味で、結婚後も男性の兄弟が両親と同じ屋根の下に住むという習慣がみられる。そのため、部屋数が必要となり、増築している家も多い。

集落上方には、雅灰村からの道路が通じている。道路の終点が送隴寨の入口で、近くに小学校が建てられている。集落はここを最上部として谷沿いに山腹斜面を下るようにして形成されている。集落の中央部には井戸が2ヶ所存在する。「オクリア」と「オリリマー」である。これらの井戸を水源として河川が流れている。集落周辺の傾斜地には竹林や雑木林が繁っている。

2) 抽出農家からみた生業形態

送隴村は1952年に土地改革が実施されたとき、戸数119戸、人口も650人であった。そのうち、送隴寨は戸数が86～87戸、人口は490人であった²³⁾。寨には土地改革以前、地主が2名の他、中農の上、中農、雇農に属する家がそれぞれ数戸、その他は貧農であった。つまり土地改革以前において、農民は、所有する耕地面積に応じて地主、富農、中農、貧農、雇農の5階層に区分されていた。このうち地主は、基本的には耕作を行わず、耕地を小作に出していた。また雇農は耕地をまったく所有していなかった。送隴寨には地主が2名、中農の上が3戸、中農が5戸、雇農が2戸その他はすべて貧農であった。なお当時当寨では所有している水田面積の規模で、このような区分がなされたのではなかった。つまり当寨では、収穫した粳の量を「挑」で表し、その挑によ

って区分したのである。1挑は80斤（40キログラム）である。良田の場合、6畝の水田から1挑の粃が収穫できた。地主では90挑余、中農の上では70挑、中農では50挑、貧農では多くが10挑の収穫があったが、畑地があるが水田を所有していない者もいた。送隴寨の地主といっても所有している水田の面積が大規模ではなく、他人に貸し出すほどの余裕がなかった。また雇農の2戸は、同郷内の瓮邦村に居住する3名の地主（漢族）が、大規模でないが送隴寨内に水田を所有していたので、その耕地を借りて耕作していた²⁴⁾。

上述したように、土地改革後は、これらの耕地はすべて没収され人民公社有となった。このように送隴寨を含む送隴村は、近くの村々と同様、農業とくに水田稲作が生業形態の中心であった。しかしながら、水田稲作といっても、水田は集落の下方前面の山腹斜面に展開している。つまり水田は、山腹斜面を切り開いて造成した棚田である。用水は集落内を流れる谷川をはじめ、同様の小河川が数河川山頂より流れているが、棚田を満たすほど十分な用水が確保できない。そのため、用水の大半は天水に依存している。当地域では雨季が年一回ある。期間は4月から7月にかけてなのであるが、この期間降水量が極端に少ないと早ばつを起こす。近年ではとくに1992年の早ばつがひどく、大きな被害を受けた²⁵⁾。このように、用水の大半を天水に依存しているため、年ごとの収穫量には相当の開きが存在するという。

以上論じたように、生業の中心である水稻は、収穫が非常に不安定であるうえに現在でも食糧が不足する家も存在する。そのため寨の住民の中には、竹細工・木工・鍛冶などの副業を農閑期を中心に細々と行っている。これらの技術は、先祖代々受け継がれてきたものではなく、人民公社時代に近くの公社からやって来た職人が数ヵ月から1年間ぐらい住み込み技術指導した結果、取得したものである²⁶⁾。この他、伝統的には製炭も行っているが、ほとんど自家消費中心で出荷することは少ない。それ故、寨の住民の最大の収入源といえば、各戸が数頭ずつ飼育している牛などの家畜の売却である。それにもかかわらず、寨内には6名が小規模ながら小売店を構えている。小売店を営業している者はすべて10代から20代までの青年で、資金は50元から300元程度出費している。この資金に関しては、榕江県興華郷高排村のアンチモニー鉱山で働いて貯金した1名を除き、他の者は両親から出してもらった。小売店では主としてタバコ、アメ、酒などを販売している。小売店を開店するには営業許可証、税務登記証などが必要で、1カ月に1元上納している。彼らはまた排調鎮、雅灰などの定期市に出かけ商売することもあるという。

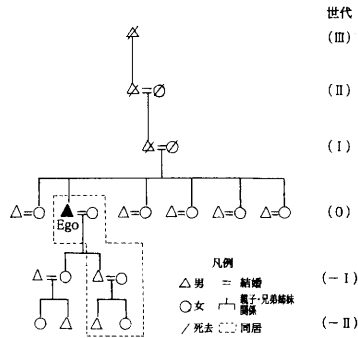
なお、アンチモニー鉱山への出稼ぎは1994年8月のことで、紹介する者があり送隴村の者40数名が集団で出かけた。作業は鉱石の運搬が主体であったが、労働が過酷なため全員2ヶ月でやめ村に帰った。賃金は高く、2ヶ月で500元余りを得た。

以下では、送隴寨の典型的な農家をとりあげ、具体的に検討していくことにする。

P・Xの場合（第7組）

主人のP・Xは57歳の漢族である。家族は6人である（第4図）。Pという姓は大変めずらしく送

隴村では6戸のみである。当寨には曾祖父の時代（第4図Ⅲ世代）に西方に位置する楊武郷の朱砂廠から70年ほど前に移ってきた。前居住地の朱砂廠は郷人民政府所在地で、水銀が産出することからこのような名前が付いたとされる。曾祖父は、元々「王」姓を名乗るミャオ族であったという。しかし当寨に定着して以来、漢族となりP姓を名乗ることになった。改姓した理由は、曾祖父の性格がPすなわち「のろま」という意味があるように、あわてず急がずという大変慎重なもので、かつ歩くのも遅かった。そこで、他人から「老P」と呼ばれることになった。そのPが姓となったのである。また事情が不明であるが、ミャオ族から漢族へと民族名称も変更した。



第4図 P・X家の家族構成
〔出所〕 P・X家での聞き取りより作成。

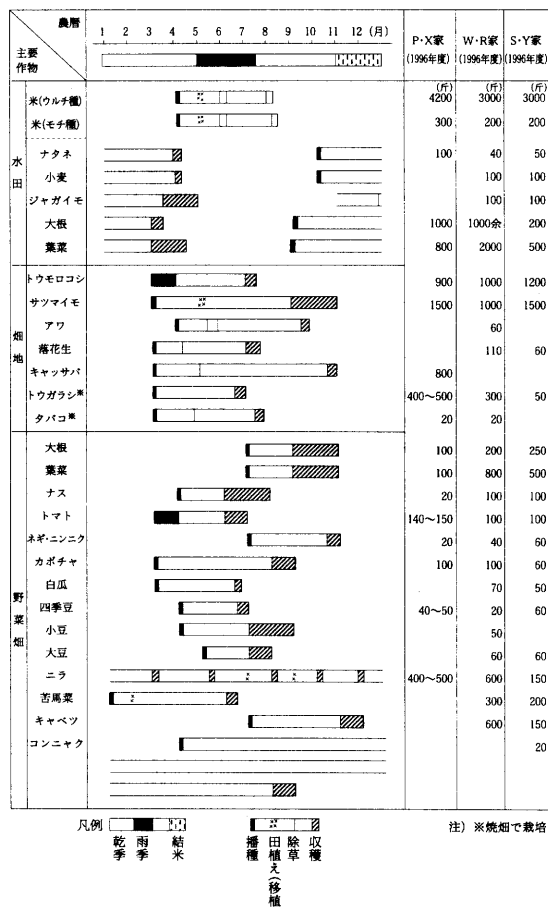
1937年に亡くなった祖父にはP・Xは会ったことがないが、現在住んでいる家はこの祖父が建ててくれたものである。祖父は農業の他に商業も手がけていたようで、川舟で三都水族自治県の県城三都や榕江県の県城榕江に出かけ、村内で集めた米を売り、その代金で塩を買い、村で販売した。父親は一人っ子で配偶者はスイ族である。

P・Xは6人兄弟であるが、P・X以外はすべて女性である。配偶者は同寨6組のミャオ族である。P・Xには男女2人の子供がいるが、娘は結婚して2児をもうけている。P・X家の家族は勉強好きで、祖父・父親も私塾で学習した。村の私塾は1944年から送隴寨で開かれており、教師は近くに住む漢族やミャオ族が担当した。塾の費用は高く、年間2枚の「大洋」と呼ぶ銀貨、1斗の米およびラード・塩・トウガラシ各1斤であった。

土地改革以前、父親と姉妹の6人家族であった。当時は水田を50挑所有し、中農に区分されていた。畑地は所有しなかったが、山林を100畝余り所有していた。これらの山林は父親が購入したものである。主食である飯米は不足しなかった。現在では上述の通り6人家族で、水田3.7畝、畑地3畝、山林20畝を所有している。

水田は大小合わせて6筆所有している。そのうち1筆（0.6畝）にモチ種の稲を栽培している（第5図）。モチ種の稲は従来からの品種で収穫量が少なく、虫害にも強くない。1980年代になると、収穫量の多いウルチ種の稲が普及した。当寨でもほとんどウルチ種の稲を植えるようになった。しかし、ウルチ種の稲が選択されるようになったのは、他のミャオ族居住地区でみられ

るように強制されたものではなかった。現在でも「ハレ」の日などに餅として食べるために、モチ種の稲を植えているのである。ウルチ種の稲とモチ種の稲は、ほとんど同時に種子を播き、田植えを実施するが、モチ種の稲の方が10日間ほど遅れて収穫する。収穫に際しては、ウルチ種は根元から鎌で刈り取るが、モチ種の場合「ミ」と呼んでいる半月形をした穂摘み具で穂刈りを行う。



第5図 農業カレンダー

〔出所〕現地調査より作成。

水稲の収穫後は、ナタネ、大根および白菜・青菜の葉菜類を裏作として植える。これらの作物はすべて自家消費用である。また水田の一部には収穫後水を張り、コイ（鯉魚）の養殖を行う。当寨の住民のほとんどの水田ではこの種の養殖を行っている²⁷⁾。水田養殖の方法は、水田の一角に年中水を張り親魚を養う。親魚が春先産卵すれば、それを他の水田に移し、8月に漁獲する。当家では年間300~400斤の漁獲がある。貴重な動物性タンパク源で「ハレ」の日などに食卓に供せられる。それ以外の水田には、収穫後レンゲが植えられる。水田の肥料とするためである。

送隴寨では畑地は、主として食糧とする作物を中心に栽培する畑地と、ごく小規模の野菜を主

体として栽培する野菜畑が明確に区分されている。P・X家の畑地では、主食となる飯米を補完するサツマイモ、トウモロコシなどを植えている。トウモロコシは通常の収穫が7月よりも1ヶ月近く早く収穫可能な品種もあるが、当家では収穫の遅い品種のみを栽培している。キャッサバは、1993年に三都水族自治県盖邪郷より導入された。主として飼育している豚をはじめとする家畜の餌となっている。なお、人民共和国成立以前には陸稲も栽培されていた。

一方野菜畑は0.2畝所有しているが、独力で開いたものである。自家用の大根、ニラなどの野菜が中心で作物の数が豊富なことが特色といえる。この他当家では毎年少しずつではあるが新しく山林を開いて畑地としている。1997年は0.2畝開いた。その場所は所有している山林で比較的傾斜が緩やかな場所である。またこの新地とは別に、焼畑も非常に小規模であるが実施している。1997年には0.05畝火入れを行い焼畑とした。火入れは晩秋から春先の晴天が続く乾季に行う。当家では、1年目はタバコ、2年目はトウガラシ、小麦、トウモロコシなどを植える。3年目以降耕地は放棄する。1997年度は1年目の焼畑にはタバコ、2年目の焼畑にはトウガラシを栽培した。

山林には杉を植林している。植林は1991年から開始し、2000本余り（16畝）植林した。他の山林には松が生えているが自生のものである。家畜としては水牛（成牛1頭、子牛2頭）3頭、豚3匹、ニワトリ1羽を飼っている。1996年水牛を1頭2000円で売却した。この代金が当家の現金収入の大半を占めている²⁸⁾。

税金としては粃200斤を「公糧」（農業税）として上納し、現金での納税はない。その他教育税として10元余りを納入する。教育税は子弟が通学していなくても村民の義務として課せられている。

W・R家（4組）

父親、配偶者と男子2人の5人家族である。母親は既に他界しており、祖父母のことは何も知らない。W姓は送隴寨に定着して以来7～8代目を数える。W・Rは50歳である。配偶者は三都水族自治県打魚郷排炮村出身の「黒ミャオ」族である。

水田は3.5畝所有しており、20筆に分かれている。年間3200斤の粃を収穫するがほとんどウルチ種である。裏作としては小麦、ジャガイモを少量ではあるが栽培していることが目立つ。ジャガイモは、1993年から植えはじめた新しい作物である。また2畝の水田にレンゲを栽培する。主として豚・牛などの家畜の餌とする。P・X家と同様、水田養殖を実施し、40斤の漁獲がある。

畑地は3畝所有している。10筆に分かれている。当家の畑地の作物でとくに目に付くのは量的には少ないがアワである。アワは古くから当地域一帯で栽培されていた作物で、トウモロコシやサツマイモが導入される以前、米と並ぶ重要な作物であったと推定できる。当家ではアワは当家の他数戸しか栽培していない。

なおタバコ、トウガラシおよび一部のトウモロコシは、現地で「パン・ラオ」と称している新しく開いた土地で栽培している。その開墾の方法は、山地に生えている雑木や草を伐り、火入れ

を行う。その後鋤で整地する。この点が農具を基本的に使用しない焼畑と異なる。いわゆる切替畑である。1年目にはタバコ、2年目にはトウガラシ、3年目にはトウモロコシを植える。その後は畑地として利用する。

野菜畑も1畝所有し、5筆に分かれている。栽培している作物の種類は、P・X家よりも多い。この点は、家畜を売却する以外現金収入に乏しいので、より自給的な生活を強いられる結果だと思われる。飯米は自給できる。

山林は20畝所有、3筆に分かれている。この山林の中に果実から桐油がとれる油桐の木が100本ほどある。収穫した果実は400斤ほどであるが、雅灰で開催される定期市に持参し売却する。当家では山菜としてワラビを採取している。年間200～300斤の収穫があり、ゆでて乾燥させ保存食としている。

家畜としては毛並みが黄色をしている「黄牛」2頭、豚1匹、ニワトリ10羽を飼育している。「黄牛」は、1995年、1997年に各々600元、1200円で売却した。また1996年にこれまで生まれた子豚をまとめて19匹雅灰の定期市で販売した。1斤4～6円で売却できた²⁹⁾。

当家では穀物倉を1棟所有し、収穫した穀物はすべてこの倉庫に保管している。また1995年までは製炭も実施し、年間300～400斤生産していた。税金としては粃を230斤上納する他、教育費20元余りを納めている。教育費も米で上納することができる。

S・Yの場合（6組）

主人S・Yは55歳である。現在8人家族で、長男は1994年に分家した。そのため次男夫婦と一緒に生活している。長女は結婚しており、子供も2人もうけているが、両親と同居している。当家は土地改革のとき貧農に区分され、10人家族であった。当時水田65挑、畑4畝、山林5畝を所有していた。現在の耕地面積はその当時と変わらないが、長男が分家したので少しではあるが耕地を分筆した。

水田は5筆で合計4畝所有している。他家同様ウルチ種の稲が圧倒的に多い。高収穫が期待できるからである。W・R家同様、小麦を裏作として栽培している。小麦は寨では1961年から植えられはじめた。ジャガイモは、他家が栽培しだったので、その様子を見て栽培を開始した。それ故、他家より栽培が数年おくれ、1995年からである。水田養殖（年間30斤漁獲）も実施しているが、レンゲは植えていない。

畑地は4筆に分かれ、3畝ある。トウモロコシ、サツマイモなど主食である飯米を補完する作物が中心となっている。野菜畑は0.5畝である。栽培している作物の中でとくに注目されるのは、コンニャクで、1980年より植えはじめた。自家消費用であるが、調理方法は次の通りである。すなわち、根茎を輪切にして乾燥させ、それを砕いて粉にする。その粉にアルカリを加えると凝固する。これを食用とするのである。当寨では食用コンニャクは調理方法が多少複雑なこともあり、御馳走で「ハレ」の日など好んで食べられる。

山林は5畝で4筆に分かれている。当家では1975年に油桐を100本植え、現在ではその果実を500斤収穫している。同様に乾燥した樹皮が漢方薬の材料として高価に販売できる杜仲を栽培している。さらに竹林もあり、初春には竹の子を300斤ほど収穫する。そのうち100斤は雅灰の定期市で販売する。

家畜としては、「黄牛」2頭、豚3匹、ニワトリ10羽を飼育している。税金は「公糧」として粳250斤、教育税として20斤の粳を上納している。

衣服を自宅で作っていることもあり、毎年三都水族自治県の都江まで出かけ、染色用の藍を20斤ばかり購入する。1斤1.5元である。なお、当家では端境期である6月を中心に主食である飯米が不足する。そのため米を比較的安価な三都水族自治県の県城まで買いに行く。その購入代金は数年に1頭ずつ売却する「黄牛」や毎年生まれる子豚などの家畜を売却した代金を充てている。

以上送隴寨の3戸を事例としてとりあげ、各戸の農業カレンダーを作成するなどして、検討を加えてきた。事例として選んだ3戸に共通しているのは、主要な生業である農業による現金収入がほとんどなく、現金収入は飼育している家畜の売却代金に依存しているという点である。このように、ほぼ自給自足に近い形式で生活を送っているが、S・Y家のように年間の食糧が不足する家庭もみられる。この点を克服しようとして、竹細工・木工・鍛冶などの副業を起こそうとしたが成功したとは思われない。

以上のような非常に厳しい生活を余儀なくさせられているが、人びとの唯一の楽しみは「ハレ」の日つまり祭日である。当寨の祭日は農耕儀礼と深く結びついているといっても過言ではない。以下では、「春節」などを除く主要な農耕儀礼をみることにする。

田植えは5月5日（以下すべて農曆）前後に実施するが、他地域では田植えを開始する前に、水田の一角に祭壇をもうけ、「開秧門」と称する儀礼を挙行することが多い。この種の儀礼は本寨では省略されている。しかし、水田に茅草を1本さすという行事、つまり茅草が神への依代となる儀礼は実施されている。この儀礼を現地では「ジュリャー」と称している。「開秧門」に相当する儀礼である。

9月の初めの「卯」の日に新米を食べる儀礼がある。この儀礼を「ネイニュカン」と称しているが、収穫祭に該当する。前述の「ジュリャー」同様集落全体で実施するのではなく、各戸で御馳走をつくり祝う。

ミャオ族の年越しは収穫が終了し、一段落ついた11月上旬である。ミャオ語では「ネイニャン」といい、チマキをつくり食べたり、餅をつく。ミャオ族最大の祭りである。この他祖先祭りで、ミャオ族最高の儀礼とされる「喫鼓臙」は、当寨では100年前（1896年）に実施されただけで行われていない。「喫鼓臙」は「鼓社節」とも称され、13年に一度挙行される儀礼である。祭礼にあたっては集落全体あるいは祖先祭りをを行う一族が全戸水牛を1頭ずつ殺して祖先の霊を鎮めるというもので、そのとき木鼓が打ち鳴らされ、祖先を呼び戻すとされる（鈴木・金丸、

1985: 58-78)。人民共和国成立後、内容があまりにも残酷であるとの理由から禁止されてきた。

なお、送隴村の周辺では1953年に三都水族自治県の排垵村で、1954年に同県打魚郷蓋頭村で挙行された。どちらも「黒ミャオ」族の集落で、これらの儀礼に参加した住民も存在する。

このように、農耕儀礼それ自体が少ないというのが送隴寨のミャオ族の特色といえよう。理由としては、元来ミャオ族とくに「黒ミャオ」族は水田稲作を中心とする農民でなかったことが考えられる。この点に関しては資料を収集して再検討したい。

おわりに

中国における代表的な少数民族の1つであるミャオ族の生業形態について、貴州省東南部の「黒ミャオ」族の1集落送隴寨を事例として、論を展開してきた。ミャオ族の中でも「黒ミャオ」族は、山間支谷や山腹斜面を主体に水田稲作に従事してきた集団である。「黒ミャオ」族が居住している自然環境が日本の風土と類似していることから、生活様式においても類似点が多く、日本人研究者が調査や関心をもってきた民族集団である。しかしながら、本文でも言及したように、実際に彼らの居住している集落に入り、調査することは、社会主義体制を堅持していることもありほとんど許可されない。したがって本調査も地元の各種の関連機関の協力により、短期間ではあったが現地の農家に宿泊して実施することができた。しかし、宿泊先を指定することが不可能なことをはじめ調査に当たって制約が存在したことも事実である。

以上のような調査上の問題が存在したが、「黒ミャオ」族の生業形態の特徴は十分に把握できたと思われる。とりわけ、今回の調査では、現在においてまだ主食である食糧が不足している家が存在するという点、さらには、人民公社時代本寨の生活レベルを向上させる目的で、竹細工・木工・鍛冶などの技術を習得させたが、その技術を生かして副業としている者が少ないことなどが判明した。今後は他地域において、具体的なフィールドサーヴェイを重ねることで、より密度の高い生業形態の比較を行いたいと考えている。

また以上で論じたように、決して経済的には豊かでない送隴寨の住民に対して、それにもかかわらず、税金のみは全戸徴収している。このような政府の対応は問題があると思われる。税金を徴収するのであれば、少なくとも郷人民政府から車両が通行できる道路網の整備、全戸の送電などの基盤整備を行なうと共に、当地域の自然環境にあった換金作物の栽培の奨励、例えば製茶およびミカンの1種であるポンカンの栽培は近くの少数民族居住地域でも実施されており、成果をあげている。政府による適切な指導が切に望まれる。近くのミャオ族をはじめ少数民族が職を求めて広西壮族自治区や広東省の都市に出かけ、若年労働者層を中心に集落から転出する以前に、何らかの政策を提示する必要がある。政府の強力な指導に期待したい。

註

- 1) 中国では、少数民族と称されるのは政府が公式に認知している集団に限定される。その合計が55なのである。その他、現在でも貴州省を中心に西族、僱家族など呼ばれている集団が75万人弱も存在する。これらの集団は、自らを少数民族と主張し続けているにもかかわらず、政府が少数民族として認めていないのである。理由は、これらの集団の人口規模が少なすぎるためであるとされている（田畑・金丸・新免・松岡・索・ダニエルズ、2001：5）。なお、上述した認知されない集団のうち西族に関しては、既に拙著において紹介したことがある（鈴木・金丸、1985：231-238）。
- 2) 従来天然資源に恵まれない地域の代表とされてきた砂漠地帯においても、その周辺であるがユイメン油田などを筆頭に多数の油田が開発されている。それ故、砂漠地帯が天然資源にまったく恵まれていないとはいえなくなっている。
- 3) 現在では、市場経済の導入などの近代化政策の影響を受けて、国境沿いの県もほとんどが対外「未開放地区」の指定を解除されている。
- 4) 中国では一般に西南区と称される。西南区とは、雲南省全域と四川省の西南地区を含む比較的狭い地域をさす。本稿では、日本での通例に従って、雲南、貴州および四川の3省を含む広義の地域を西南中国とみなす。
- 5) 周知のように、本稿の対象地域である西南中国の少数民族居住地区においては、一般に省—州—県—郷—村—寨—組（設置されていない場合もある）という順で行政的な区分がなされている。
- 6) 調査は1997年8月に実施した。同行は昭和女子大学田畑久夫教授（文化地理学専攻）の他、地元の行政官、公安（日本の警察官に相当）およびテレビ局（地元）のクルーズなどが加わった。
- 7) この他、西南中国の一角を占める四川省の山間部を中心に分布・居住するイ族も、ミャオ族やヤオ族と同様にベトナム北部の山岳地帯に分布・居住し、この集団の伝統的な名称であるロロ族と呼ばれている。しかし、ロロ族の分布・居住範囲はごく限定されており、人口も非常に小規模である。
- 8) 具体的に鳥居龍藏は次の著作を参照した（鳥居、1907、〈鳥居、1976所収：20-35〉）。
Du Halde. (1736) : "Description de l'empire de la Chine et de la Tartarie Chinoise"
Lockhart, W. (1861) : "On the Miaotze or Aborigines of China"
Hosie, A. (1897) : "Three years in western China"
- 9) 鳥居龍藏によれば、ミャオ族に関しては以下のような広・狭の2通りの解釈が存在するという。すなわち、「一ハ即チ苗族ノ文字ヲ広義ニ用キ「猺」、「獯」、「黎」、「土人」、「猓」等ノ諸族ヲ包含スルモノニシテ、一ハ即チ狭義ニ用キ、僅カニ「苗」ノ一種族ノミヲ云ヘルモノ

ナリ」(鳥居, 1907, 〈鳥居, 1976所収: 25-26〉)と論じ、後者つまり狭義の立場を採用するという。そして後者に所属するミャオ族を純粹のミャオ族と称するのである(鳥居, 1907, 〈鳥居, 1976所収: 26-29〉)。

なお、鳥居龍藏の引用文中「土人」という用語は現在では不適切な表現であるが、原文の歴史性を最大限考慮してそのままとした。

- 10) しかし、1980年代初頭ではほとんどの女性が民族衣裳を着ていたが、その後道路沿いの交通の便がよい地点に居住するミャオ族は、「ハレ」の日は例外として日常生活では諸民族と同様のブラウスとズボンという形式の衣服を着用している者が増加し、外観上みわけがなくなっている。
- 11) ただし「白ミャオ」族だけは藍染めの技術を知らなかったようである。つまり、「白ミャオ」族が着用する衣服の素地は、木綿からではなく麻(「火麻」)からつくる麻布を使用した。彼らが木綿の栽培の適さない高地に主として居住しているためである。麻布は綿布と比較すると繊維が荒く、ごわごわして堅いという特質をもつ。そのため、藍染めには適さないのである。
- 12) ミャオ族よりも海拔高度の低い土地条件の良好な場所に居住していたトン族の場合、「鼓楼」と称する集落内部に砦に相当する木造の多重塔を設置し、盗賊などの見張りに用いた。
- 13) 1990年度人口センサスによれば、ミャオ族105,805人、漢族20,392人、スイ族11,468人、トン族1,174人、プイ族723人、イ族713人、トウチャー族136人、回族78人、ヤオ族78人、チュワン族54人、コーラオ族31人、その他の民族53人、未識別民族65人である(黔東南苗族侗族自治州地方志編纂委員会編, 1990: 103)。なお、未識別民族とはどの民族にも入っていない人びとをいう。
- 14) 調査時点(1997年)では雅灰郷までの道路の拡張工事が終了していなかった。1998年に雅灰郷までの拡張工事が完成し、ジープや4WDの小型車両が通行できるようになった。
- 15) 現地では村居小組と称している。寨が日本のムラに相当するのに対して、組は行政上便宜的に区切られた性格が強い。
- 16) 雅灰郷人民政府には、民政辦公室(事務室)、社総辦公室、土管所、文衛辦公室、農推站(事業所)、林業站、財政所、教育輔導站、医院、裁判所、婦聯、团委、党委辦公室、政府辦公室などの関連機関の出張所がある。その他寨内には派出所、供銷站、信用社、粮站などもおかれている。
- 17) 近くの定期市としては雷山県の達地鎮および三都水族自治県の打魚(共に開催日は農曆の犬と龍の日)がある。両定期市は共に20キロメートルぐらい離れており、徒歩で4時間強の距離である。
- 18) これら4集団の自称はすべて「ガノウー」と称している。「黔東南」方言地区のミャオ族は、

前述したように「ムー」などという自称をもつ集団が多いのであるが、「ガノウー」という自称は、他の「黔東南」方言地区では聞いたことがない。しかし、女性の民族衣裳からみれば、これらの4集団は「黒ミャオ」族であることが明白である。

- 19) 送隴村の幹部は次の通りである。村長（男性、45歳、ミャオ族）、副村長兼会計（男性、27歳、ミャオ族）、民兵連長（男性、40歳、ミャオ族）、治保主任（男性、31歳、ミャオ族）、婦女主任（女性、28歳、ミャオ族）、党支部書記（男性、26歳、ミャオ族）、調解主任（男性、35歳、ミャオ族）。なお村長および治保主任以下は住民（党支部書記は党员のみ）の選挙で選ぶ。
- 20) 特別の事情があれば他の井戸も使用できるが、同意が必要である。なお井戸の衛生は使用する家が清掃することになっている。
- 21) 送隴村には王、蒙、李、韋、石、皮の6姓がある。送隴寨の場合、石姓がもっとも多く90戸、次いで蒙姓30戸以下王姓・李姓と続く。漢族は6戸あるがすべて韋姓である。
- 22) このように祖先の移動経路を比較的良好に記憶しているのは、結婚式あるいは家屋の新築のときなどに歌う「古歌」あるいは「逃歌」の中に、祖先がかつて居住していた地名が織り込まれているからである。「逃歌」とは、老人がある場所から他の場所へと逃げのびてきたことを示す歌で、老人つまり祖先を想起するために歌い続けられているという。
- 23) 送隴寨の古老の話を総合した。以下の土地改革以前の状況も同様である。
- 24) これら瓮邦村の地主は、合計130挑の収穫が期待できる水田を送隴寨内に所有していた。
- 25) この他虫害も度々発生する。とくに1994年度は雅灰村だけではなく、雅灰郷全域にもその被害が拡大した。
- 26) このように他所からやって来た職人が竹細工・木工・鍛冶を習えることを「三合一」と称した。「三合一」は当時の国家の政策でもあった。なお、現在当寨で農業以外に職業をもっている人は、民辦教師1名の他、外地に出稼ぎに出ている2名のみである。
- 27) 水田養殖は近くに居住するトン族が開始したものであるという。現在では、ミャオ族を筆頭に他の少数民族間でも実施していることが多い。しかし、水田養殖を行うと、農薬を散布することができないという問題も惹起している。
- 28) 当家では、長男が村の小学校の民辦教師として働いているので、家畜の売却以外に定期的な現金収入がある。
- 29) 当家でも他のミャオ族の集落と同様に牛・豚などの売却に関しては、体重によって価格を決定した。そのため1斤当たりいくらという価格が決まるのである。

参考文献

- 浅川滋男 (1994) 『住まいの民族建築学 江南漢族と華南少数民族の住居論』 建築資料研究社
- 金丸良子 (1997) 「制約の多い社会主義国でのフィールドサーヴェイの前提」 『地理』 42-4、64～67頁.
- 金丸良子 (2001) 「書評：松岡正子著 チャン族と四川チベット族」 『中国21』 10、243～249頁.
- 金丸良子・久野晶子 (1999) 「中国雲貴高原の少数民族の服飾—ミャオ族を事例として—」 『民俗と歴史』 28、1～20頁.
- C.ダニエルス・金丸良子・長谷川清・松岡正子 (1999) 「中国におけるフィールドワークの可能性」 『中国21』 6、3～24頁.
- 鈴木正崇・金丸良子 (1985) 『西南中国の少数民族 貴州省苗族民俗誌』 古今書院
- 田畑久夫 (1998) 「「高坡ミャオ」族の生業形態—貴州省・従江県谷坪郷山崗村を事例として—」 『東アジア研究』 19、21～46頁.
- 田畑久夫・金丸良子・新免康・松岡正子・索文清・C.ダニエルス (2001) 『中国少数民族事典』 東京堂出版
- 鳥居龍藏 (1907) 『苗族調査報告』 東京帝国大学理科大学人類学教室、鳥居龍藏 (1976) 『鳥居龍藏全集 第11巻』 朝日新聞社 1～280頁所収.
- 三木産業(株)技術室編、木村光雄監修 (1992) 『藍染めの歴史と科学』 裳華房 (ポピュラーサイエンス)
- 国家民族委員会民族問題五種叢書編輯委員会編 (1981) 『中国少数民族』 人民出版社
- 黔东南苗族侗族自治州地方志編纂委員会編 (1990) 『黔东南苗族侗族自治州志 地理志』 貴州人民出版社